

2024年1月分総評 杉本真維子

「イヤホンを着けて／死なない振りをして／乗り込む電車／春の風吹く」篠遠 早紀（東京都）

死を忘れて生きる日々が描かれている。つまり私たちの日常が描かれている。

「大いなる他人事だと水底で／籠のひしゃげた自転車を押す」常田 瑛子（山口県）
水中のあの「こもった感じ」を思い起こさせる。しんとしたひとりの深い落ち着き。

「こんなにも／明日があるとは思えない／カレンダーは嘘をついている」橋口 諒介（東京都）

この疑いは誇張ではないだろう。心の奥まったところからハダカの言葉をひっぱりだしている。

「吠えるとき窓の一枚厚すぎる」杉本 太（北海道）

話者はどこにいるのか。人間とも動物ともとれるところが面白い。いずれにしても世界との隔たりや遠さという普遍的なものが伝わる。

「やさしくて静かなひとを／鎮めてる湿布の／剥がれてくる言葉を」五月閉じ花（北海道）
非常に小さな声に耳を澄ませている。自分の耳で聴こうとする姿勢が際立つ。

「神さまが固く絞ったような梅／だからひとりであるほどきれい」穴棍蛇にひき（東京都）
梅のすがたによってひきだされる「ひとり」の美しさ。「だから」という接続詞の力も際立つ。

「犬だった／頬に畳の痕をつけ／青い草原 ああ、水だった」平山（東京都）

どんなものにもなれるように予め心身に空き地をつくっている。そのことが改行や読点からうかがえる。

「別人のような昨日の持ち主に頼ま／れてしかたなく鳴る目覚まし」宮下 駿（東京都）

「目覚まし時計」という第三者は一つの発見だろう。

「古井戸に蛍を放つ左手は／夜の重さを叩き割れない」常田 瑛子（山口県）

「叩き割れない」が素晴らしい。それによって逆に叩き割れるほどの力がうみだされている。

「八朔をばりりと剥いて／涙目の／守られた生にくちづけをする」鈴木たなか（京都府）

「ばりり」と強くひきしまった「八朔」。3行目のやわらかさがそれを引き立てている。

新しい投稿者が増えています。次回も楽しみにしています。